



用地が決まったことを伝える新聞記事
(昭和10年1月9日付)

夢の国際空港

1968年（昭和43年）銀色の鯨のような飛行船が茂原の空を飛んだことがありました。ゆつたり進んでいく丸みを帯びた姿は、愛嬌がありました。それより30年余り前、もつと大型の飛行船の国際空港を造る計画が、茂原にあったのです。

あこがれの飛行船

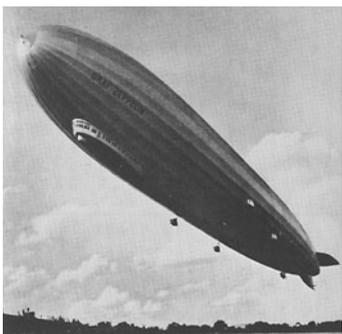
1928年（昭和3年）ドイツで「グラーフ・ツェッペリン号」が建造されました。翌年、アメリカによる旅客輸送を前提としたデモンストレーションの世界一周で日本の上空にも姿を現し、初めて飛行船を見る人々に鮮烈な印象を与えました。

ビッグニュース流れる

「あのツェッペリン号を日本が買う!」。1934年（昭和9年）、日本中がびつくりするような記事が朝刊各紙に載りました。太平洋横断定期航路に乗り出す、ということです。飛行船の国際空港を、ぜひ我が町にと、その誘致に向けて東郷村の村長、茂原町や豊田村の熱心な推進者が中心となり、用地買収などの計画をまとめた記録が残っています。

原野から航空都市に・・・

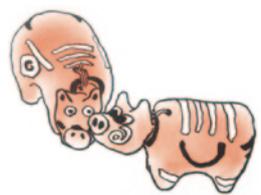
ついに、用地は長生郡茂原町に決まりました。現在の萩原から東郷にかけて約150万坪（皇居の約5倍に相当）の広大なものでした。候補となった駅の北側の土地は当時は原野でした。太平洋に近く、天然ガスの利用も可能で好条件だったのでしよう。



グラーフ・ツェッペリン号

飛行船には牛の盲腸？

巨大な飛行船を浮かせるためには、水素やヘリウムガスを詰めた大量の気嚢が必要です。ガス漏れに強く、静電気を起こさず、軽いという気嚢の素材条件を満たすものは、牛の盲腸の外側の皮膜です。牛1頭から15疋×100疋しか取れず、1隻の飛行船には80万頭分も必要でした。



町の熱い期待

空港とともに、ホテル、ゴルフ場、牧場、温泉なども建設される予定で、町は一大リゾートタウンに生まれ変わるはずでした。日本とアメリカを短時間で結ぶ計画が明らかになるにつれ、反響は全国に広がりました。空港ができたら町はどれだけ発展するのか、地元茂原の人々の期待はいやがうえにも高まったに違いありません。

最先端！高速の旅

ツェッペリン号の世界一周の途中、ドイツから日本までの1万1千キロを、わずか100時間で飛行し、平均時速は110キロでした。同じコースをシベリア鉄道なら約2週間、快速汽船なら1か月以上といえますから、当時としては信じられないくらいの高速です。

また、大量の物資や人を乗せて長距離飛ぶことが可能でした。

相次ぐ墜落事故

飛行船は遊覧や物資運搬、そして、軍事的には偵察機、空飛ぶ航空母艦としても活用されました。

しかし、アメリカの航空母艦「メイコン号」、大西洋定期運航に就いていたドイツ

(次頁へ)